

# 日蓮大聖人御書全集

わかんおうだい き

和漢王代記

新版  
954  
〜  
968

和漢王代記

わかんおうだいき

伏羲

ふつき

三皇

さんこう

神農

しんのう

黃帝

こうてい

三墳五典

さんぷんごてん

少昊

しょうこう

顓頊

せんぎよく

五帝

ごてい

帝嚳

ていこく

堯王

ぎようおう

男子九人、

なんしくにん

女二人

むすめににん

殷 いん 夏 か

舜王 しゅんおう

第一 だいいち  
文王 ぶんおう

第二 だいに  
武王 ぶおう

周公旦 しゅうこうたん

第三 だいさん  
成王 せいおう

第四 だいし  
昭王 しょうおう の御宇 ぎようにじゅうしねんきのえとら 二十四年甲寅 あ に当たる

四月八日 しがつようか 仏 ほとけ の御誕生 ごたんじよう なり

五色ごしきの光氣こうき、南北なんぼくに亘わたる。太史蘇由たいしそゆうこれを占うらう

ちゅうげんしちじゅうくねん

中間七十九年なり

周しゅう

第五だいご 穆王ぼくおうの五十二年壬申ごじゅうにねんみずのえさる あに当たる

にがつじゅうごにち ごにゆうめつ

二月十五日 御入滅

じゅうに にじ なんぼく わた たいしこた うらな

十二の虹、南北に亘る。太史扈多これを占う

さんじゅうしちおう はちあ

三十七王あるいは八有り

いち じゅきよう

一 儒教

ごじよう ぶん ぶとう

五常 文・武等なり

こうきゆう がんかい

孔丘 顔回

漢 かん

秦 しん

前漢 ぜんかん

三教 さんぎよう

十四代 じゅうしだい

二世王 にせいおう

始皇 しこう

三教 さんぎよう

二 に

道教 どうきよう

仙教 せんきよう

老子 ろうし

三 さん

釈教 しゃくきよう

一代五十余年 いちだいがじゅうよねん

儒教 じゆきよう

道教 どうきよう

釈教 しゃくきよう

ほとけ めつごいつせんいちじゅうごねん あ  
仏の滅後一千一十五年に当たるなり

しゅう だいし しょうおうにじゅうしねん ごかん だいに  
また周の第四の昭王二十四年より後漢の第二

こうぶ いた いっせんいちじゅうごねん あ  
光武に至るまで一千一十五年に当たるなり

ごかん  
後漢 光武皇帝永平十年丁卯

いっせんいちじゅうごねん あ  
一千一十五年に当たる

まとうが じくほうらん ににん しょうにん しじゅうにしょうきよう  
摩騰迦・竺法蘭の二人の聖人、四十二章經

しょうじようきよう じゅうじゅうだんけつきよう だいじようきよう  
〈小乗經〉、十住断結經 〈大乘經〉を

はくば お かんど わた  
もつて白馬に負わせて漢土に渡す

ぎ  
魏

そうかんぎようわた  
双觀經渡る

西晋 せいしん

晋 しん

後秦 こうしん

宋 そう

齊 せい

正法華經十卷渡る。法護三蔵亘す しょうほけきょうじつかんわた ほうごさんぞうわた

妙法華經渡る。七卷あるいは八卷。羅什三蔵亘す みょうほけきょうわた しちかん はっかん らじゅうさんぞうわた

三論宗渡る さんろんしゅうわた

阿弥陀經亘る あみだきょうわた

華嚴經亘る けごんきょうわた

觀經亘る かんぎょうわた

大涅槃經亘る だいはねはんぎょうわた

南三 なんさん

三時 さんじ

四時 しじ

五時 ごじ

十師 じっし

江南なり こうなん

一 いち

二 に

三 さん

四 し

五 ご

六 ろく

七 しち

北七 ほくしち 五時 ごじ 一音 いっおん 半満 はんまん 三教 さんぎょう 四宗 ししゅう 五宗 ごしゅう 六宗 ろくしゅう

江北なり こうほく

曇鸞法師、浄土宗を立つ どんらんほつし じょうどしゅう た

禅宗渡る。達磨大師なり ぜんしゅうわた だるまだいし

撰論亘る 南北 しょうろんわた なんぼく

地論亘る 南北 じろんわた なんぼく

別時意趣の法門出来す べつじいしゆ ほうもんしゆつたい

末 すえ 観音の化身なり。道宣の感通伝に出ず かんのん けしん どうせん かんつうでん い

南岳大師、また慧思禅師と云う なんがくだいし えしぜんじ い

梁 りょう



はじめ

ろっこんじょう　ひと　にほん　じょうぐうたいし  
六根淨の人なり。日本の上宮太子これなり

てんだいだいし　おんし  
天台大師の御師なり

にほん　でんぎようだいし　う  
日本に伝教大師と生まる

陳　ちん

ちしや　い  
また智者と云う

てんだいだいし　ちぎ  
天台大師　また智顗

とくあん　い  
また徳安と云う

隋　ずい

おんとき　なんさんほくしち　さき　ごひやくよねん　にん  
この御時、南三北七ならびに前の五百余年の人

し　さんぞう　た　じっし　ぎ　は　はじ  
師・三蔵の立つるところ、十師の義を破し、始

ごじ　はつきよう　さんがん　ろくそく　じっきよう　じゅうじよう  
めて五時・八教・三観・六即・十境・十乗を

立つ た

小釈迦と号す。進んでは天竺の論師にも超え、

退いては震旦の人師に勝るるなり

玄義の三に云わく。故に、章安大師云わく「天

竺の大論すら、なおその類いにあらず。震旦の

人師、何ぞ勞わしく語るに及ばん。これは誇耀

にあらず。法相のしからしむるのみ」

また智証大師云わく「天台世に出でて、仏意快

く暢ぶ。あに万教再び世間に演ぶるにあらず

や「授決集なり」  
じゅけつしゅう

ぎゅうた くつた りようさんぞう てんぽんほけきよう わた  
笈多と崛多の両三蔵、添品法華經を渡す

どうしゃく ぜんどう よ あ  
道綽・善導この世に在り

けごんしゅう  
華嚴宗

ごかん よ とう しんぶこうてい かいげんじゅうはちねんかのえうま いた  
後漢の世より唐の神武皇帝の開元十八年庚午に至るま

ろっぴやくろくじゅうしさい わた きよう りつ ろんごせんしじゅうはちかん  
で六百六十四載に渡るところの經・律・論五千四十八卷、

やくしゃいっぴやくしちじゅうろくにん  
訳者一百七十六人なり

みょうらく よ ひと  
妙樂はこの世の人なり

ほっそうしゅう げんじようさんぞうさいてん わた  
法相宗は玄奘三蔵西天よりこれを渡す

とう  
唐

真言宗は善無畏三蔵・金剛智三蔵これを渡す

法相宗・真言宗の二宗は天台これを見ず。妙楽大師こ

れを見て、天台宗に対当して勝劣を論ず。また日本国の

伝教・慈覚・智証これを諍う

宋

てんだい げんぎ じゅう なんぼく じっし は い  
天台の玄義の十に南北の十師を破して云わく「ただし、

しょういゆうおん きょうほう かた ぜんだい しよし  
聖意幽隱にして教法いよいよ難し。前代の諸師、あるいは

めいしよう

う

おも

しんきん

い

せんぱくじゅうおう

ほぼ名匠に承け、あるいは思い神衿より出ず。阡陌縦横な

りといえども、いずれか是なるを知らしむることなし。しかるに、

ぎなら

た

りふた

あ

ふか

ゆえんあ

義双び立たず、理兩つながら存ることなし。もし深く所以有

しゆたら

あ

ろく

もち

もんな

ぎな

り、また修多羅と合わば、録してこれを用いる。文無く義無

しんじゆ

ければ信受すべからず」

せん

じゆう

い

ひと

まった

ぜ

な

籤の十に云わく「二つとして全く是なること無きをも

ゆえ

いちいち

なん

は

つての故に、一々に難じ破す」

げん

さん

い

きようまんや

ぜつこうちゆう

ただ

玄の三に云わく「輕慢止まざれば、舌口中に爛る」

い

ほつけ

しゆきよう

そうかつ

また云わく「法華は衆経を総括す」

せん さん い い ほっけいぜん け あ ほう ほんとう

籤の三に云わく「已」へ法華已前の華・阿・方・般等の

いっさいきよう こん むりようぎきよう とう ねはんぎようとう ほっけいご

一切経」今へ無量義経なり」当へ涅槃経等の法華已後の

いっさいきよう みよう かた まよ ぜつただ や

一切経なり」の妙、ここにおいて固く迷えり。舌爛れて止

けほう ほうぼう つみ くじようこう

まざることは、なおこれ華報なり。謗法の罪は、苦長劫に

なが

流る」

なんさんほくしち けごんしゅう ほうぞう ちようかん しんごんしゅう にほん

南三北七ならびに華嚴宗の法蔵・澄観、真言宗の日本の

こうぼうとう ほけきよう けごんぎよう すぐ さんろん

弘法等は、法華経よりも華嚴経を勝るとするなり。また三論

かじよう ほけきよう はんにやきよう すぐ ほつそう じ

の嘉祥は、法華経よりも般若経を勝るとす。また法相の慈

おんとう ほけきよう じんみつきよう すぐ しんごんしゅう

恩等は、法華経よりも深密経を勝るとす。また真言宗の

ぜんむいさんぞう

こんごう ちさんぞう

ふくうさんぞうとう

ほけきよう

善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等は、法華経よりも

だいにちきよう すぐ

しゅうじゅう そうい

大日経を勝るとするなり。これらの宗々の相違いかん、

そうい

相違いかん。

じゆけつしゆう い

えんちんちしやうだいし

授決集に云わく〈円珍智証大師〉、

もん だいきよう い

ひと

え

ひかり

「文は大経に出でたり。人のこれを会することなし。光

もう まえ あ

かれ

むよう

ほとけふんみよう

は盲の前に在れども、他においては無用なり。仏分明に

ごみ たと と

ごじ おし

たと

うんぬん

やくあ

五味の喩えを説き、五時の教えに喩えたもう云々。訳有つ

このかた こうしやみち あふ

ごみ だん

てより来、講者路に溢るれども、いまだかつて五味を談ず

ぎ げ

おの くおく まか

げいご

なん ぞう

るの義を解せず。己が胸臆に任せてたやすく囃語す。何ぞ象

ふ しゅもう もの こと てんだいよ い ぶつ い こころよ  
に触るる衆盲の者に異ならんや。天台世に出でて、仏意快

の ばんきようふたた せけん の なんぼく  
く暢ぶ。あに万教再び世間に演ぶるにあらずや。南北の

こうしよう きようろん しゃく もの おのおのきようじ た ひやく  
講匠、経論を釈する者、各教時を立つれども、百に

ひと ぜ  
して一つも是なることなし。ただ教部の前後・頓漸・権実・

だいしよう そみよう かんきよう しんぴ まよ よ だいきよう あみ  
大小・麤妙・寛狭・進否に迷うに縁つてなり。大教の網

は ほうかい うみ わた にんてん うお すく ねはん きし お  
を張つて法界の海に亘し、人天の魚を済つて涅槃の岸に置

く。かくのごときも、その遺漏を恐る。いわんや諸師の輩

あみ いちもく とき ちよう え まんぞう そら  
の羅の一目をや。いずれの時にか鳥を得ん。もし万蔵を暗

りしゆ え しゆうねんた たから かぞ  
んずといえども、この理趣を会せずんば、終年他の宝を計



みずか　はんせん　ぶんな　むな　じょうろん　ま　ちようひよう　みず  
えて自ら半銭の分無く、虚しく諍論を益し、長氷に水を  
そ　添うるのみ」

じゆけつしゆう　ほつそうしゆう　じおんだいし　は　い  
授決集に法相宗の慈恩大師を破して云わく、

ごしようしゆう　い　みじゆく　ほつけろん　さき　ふた　みじゆく  
「五性宗の云わく『未熟』（法華論の「前の二つは未熟」

もん　い　まさ　ふじゆく　い　いまい　ひろ  
の文なり』」  
い　は、  
い　応に不熟と云うべし○今謂わく、  
い　汎

ほつけ　こう　ぎ  
く法華を講ずるには、すべからくこの義をもつて正となす

きよう　は　ろん　は　つみぎやく  
べし。もししからずんば、  
き　経を破し、  
き　論を破し、  
き　罪五逆に

きこう　のぞ　ほか　ひと　か　ふじゆく　ぎ  
過ぎたり。基公を除いてより外は、人にして彼の不熟の義を

つた　な　し　しゆう　こうしじつぼう  
伝うるもの無し○もし強いてこれを執せば、公私十方の

しんせ け がた け がた け なん さんず  
信施をば消し難し、消し難し。もし消せずんば、何ぞ三途を

まぬか なんじ くよう もの さんあくどう お ほうぼう ざいほう  
免れん。爾を供養せん者は、三惡道に堕ちん。謗法の罪報

ほつけ はんによ しよだいじようきよう いつさいあき と ちしやひら  
は法華・般若の諸大乘經に一切明らかに説けり。智者披く

なんじ しんじゆ むけん まね  
べし○爾これを信受すべし。無間を招くなかれ」

じゆけつしゆう えんちん しんごんとう しよしゆう い  
授決集〈円珍、真言等の諸宗を徴めて云う〉

しんごん ぜんもん けごん さんろん ゆいしき りつごう じようく にろんとう  
「真言・禅門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等は

ほつけ ねはんとう きよう のぞ しやういんもん もん  
○もし法華・涅槃等の經に望めば、これ接引門なり」文

い だいてい た おお さんぎよう あ えんし いた すく  
また云わく「大底、他は多く三教に在り、円旨至つて少

なきのみ」

こうぼうだいし　にきようろん　さと　いま　きようもん　よ

弘法大師の二教論に「喩して曰わく、今この経文に依る

ほとけごみ　ごぞう　はいとう　そうじ　だいご　しよう

に、仏五味をもつて五蔵に配当す。総持を醍醐と称し、

しみ　しぞう　たと　しんたん　にんしとう　あらそ　だいご　ぬす

四味をば四蔵に譬う。震旦の人師等、諍つて醍醐を盗んで

おのおのじしゅう　な

各自宗に名づく」

にゅう　あなん　阿難

いち　そたらん　きよう　組多覧　経

らく　うはり　優婆離

に　びなや　りつ　しょうじょう　二　毘那耶　律　小乗

しょう　かせんえん　迦旃延　生

六波羅蜜經

五藏

三

阿毘達磨

論

熟

文殊

四

般若蜜藏

醍醐

金剛藏

大乘

五

總持陀羅尼藏

乳

一

多覽

酪

二

毘那耶

生しょう

三さん  
阿毘達磨

弘法大師こうぼうだいしこの経きょうに

依よつて五蔵ごぞうを立たつ

四し  
般若はん若にやはら蜜みつ

熟じゆく

華け

方ほう

般はん

法ほつ華け

涅槃ねはん

醍醐だいご

五ご  
陀羅尼蔵だににぞう

大日だいにちの三部経さんぶきょう

にきようろん い

しやつきようとうか すす

二教論に云わく、「しかのみならず、釈教東夏に漸み、

び ちよ いた かん めい はじ しゅう てん のち

微より著に至る。漢の明を始めとなし、周の天を後となす。

ちゅうげん ほんでん みな けんきよう げんそう だいそう

その中間に翻伝するところ、皆これ顕教なり。玄宗・代宗

とき こんち こうち ひ みつきよううつ お さか ひしゆ

の時、金智・広智の日、密教鬱として起こり、盛んに秘趣

だん しんやく ひあさ くあ のぞ りようが ほうぶつ

を談ず。新薬は日浅くして旧痼いまだ除かず。楞伽の法仏

せつぼう もん ちど しょうしんみようしき く いた くおく

説法の文、智度の性身妙色の句のごときに至つては、胸憶

は もん え じしゅう か ぎ と お

を馳せて文を会し、自宗を駆つて義を取る。惜しいかな、

こけんだいご な

古賢醍醐を嘗めず」

にほん  
日本

じんたいじゅうにだい  
神代十二代

てんじんしちだい  
天神七代

ちじんごだい  
地神五代

にんだいひやくおう  
人代百王

だいいち  
第一  
じんむてんのう  
神武天皇

りやく  
これを略す

だいじゅうし  
第十四  
ちゅうあい  
仲哀

はちまんだいじん  
八幡大神の父なり  
ちち

だいじゅうご  
第十五  
じんぐうこうこう  
神功皇后

はちまんだいぼさつ  
八幡大菩薩の母なり  
はは

だいじゅうろく  
第十六  
おうじんてんのう  
応神天皇

いま  
今の八幡大菩薩なり  
はちまんだいぼさつ

りやく  
略

だいさんじゅう  
第三十

きんめいてんのう  
欽明天皇

ちやつき い きんめいてんのう あめのしたしろしめすじゅうさんねん  
歴記に云わく「欽明天皇の治天下十三年

みずのえさるのとし ふゆじゅうがつついたち ひやくさいこくせいめいおう ぶつぞう きょう  
壬申歳の冬十月一日、百済国聖明王より仏像・経

とうはじ にほんこく おく  
等始めて日本国に送る」

だいさんじゅういち  
第三十一

びだつ  
敏達

うまやどの みこ  
厩戸王子

してんのうじ つく  
四天王寺を造る

だいさんじゅうに  
第三十二

ようめい  
用明

しょうとくたいし しょうめい みこ  
聖徳太子は用明の御子なり

じょうぐうたいし  
上宮太子

もりや き  
守屋を切る



しじゅうくいん た  
四十九院を立つ

なんがくだいし ごしん  
南岳大師の後身なり

く せ かん の ん すいじやく  
救世観音の垂迹なり

だいさんじゅうさん すしゅん  
第三十三 崇峻

だいさんじゅうし すいこ  
第三十四 推古

だいさんじゅうご じよめい  
第三十五 舒明

だいさんじゅうろく こうぎよく  
第三十六 皇極

だいさんじゅうしち こうとく  
第三十七 孝徳

だいさんじゅうはち さいめい  
第三十八 斉明

第三十九

天智

第四十

天武

第四十一

持統

第四十二

文武

第四十三

元明

第四十四

元正

六宗

俱舍宗

律宗

成実宗

法相宗

さんろんしゅう  
三論宗

けごんしゅう  
華嚴宗

ぜんしゅうあ  
また禪宗有り

いつさいきょうあ  
ならびに一切経有り

だいしじゅうご  
第四十五  
しょうむ  
聖武

しょうむてんのう  
しょうむ  
とうだいじ  
だいぶつ  
つく  
聖武天皇、東大寺の大仏を造る

きんめい  
しょうむ  
いた  
にひやくしじゅうよねん  
欽明より聖武に至るまで二百四十余年なり

しんたんこく  
がんにんわじょうわた  
りっしゅう  
わた  
つ  
てんだい  
震旦国より鑑真和尚渡る。律宗を亘す。次いでに天台

しゅう  
げん  
もん  
しとう  
わた  
宗の玄・文・止等を渡す

とうだいじ  
しょうじょうかいだん  
た  
また東大寺の小乗戒壇を立つ

だいしじゅうろく  
第四十六

こうけん  
孝謙

しょうむ むすめ  
聖武の女

だいしじゅうしち  
第四十七

あわじ  
淡路

はいてい  
廃帝

だいしじゅうはち  
第四十八

しょうとく  
称徳

こうけん そくい  
孝謙また即位するなり

だいしじゅうく  
第四十九

こうにん  
光仁

かんむ ちち  
桓武の父なり

きんめい にひやくろくじゅうよねん およ  
欽明より二百六十余年に及ぶ

えんりやくさんねん なら みやこ なごかきよう うつ  
延暦三年、奈良の都より長岡京に遷る

えんりやくじゅうさんねん ながおかきよう うつ  
延暦十三年、長岡京より平京に遷る

えんりやくにじゅうごねん ごほうきよ  
延暦二十五年、御崩去

だいごじゅう  
第五十

かんむ  
桓武

えんりやくしねん えいざん た  
延暦四年、叡山を立つ

でんぎようだいし  
伝教大師

さいちよう

## 最澄なり

えんりやくにじゅうねん えいざん はつこう はじ なんきよう じゅうにん しょう

延暦二十年、叡山に八講を始め、南京の十人を請ず

えんりやくにじゅういちねん しょうがつじゅうくにち たかお なんきよう

延暦二十一年の正月十九日、高雄において南京の

じゅうしにん さいちよう しゅうろん

十四人と最澄と宗論あり。

どうにじゅうくにち ろくしゅう じゅうしにん しゃひよう かんむせいしゆ たてまつ

同二十九日、六宗の十四人、謝表を桓武聖主に奉る

えんりやくにじゅうさんねん につそう どうにじゅうしねん ごきちよう

延暦二十三年、入宋。同二十四年、御帰朝

おんとき はじ でんぎようだいし てんだいしゅう た しじゅうよねん

この御時、始めて伝教大師、天台宗を立て「四十余年」

もん ろくしゅう やぶ はじ ほっけ じつぎ

の文をもつて六宗を破り、始めて法華の実義これを

あらわ きんめい にひやくよねん じゃぎ あらた

顕し、欽明より二百余年の邪義これを改む

ろくしゆう せきとく こんぞう しゅえん げんようとう じゅうしにん かん  
また六宗の碩徳たる勤操・修円・玄耀等の十四人、桓

むこうてい しやひよう たてまつ じゃけん ひるがえ  
武皇帝に謝表を奉つて邪見を翻す

こうぼうだいし こうかい えんりやくにじゅうさんねん ごにつそう だいどうがんねん  
弘法大師〔空海〕は延暦二十三年、御入宋。大同元年、

ごきちよう  
御帰朝

でんぎようだいし やましなでら ぎようひようそうじよう みでし こうぼうだいし  
伝教大師は山階寺の行表僧正の御弟子、弘法大師

いわふち こんぞうそうじよう みでし  
は石淵の勤操僧正の御弟子なり

だいごじゅういち へいぜい  
第五十一 平城

だいごじゅうに さが  
第五十二 嵯峨

かいだん た  
戒壇を立つ

こうにんじゅうさんねんろくがつよつか でんぎようだいしごにゆうめつ どうじゅういちにち  
弘仁十三年六月四日、伝教大師御入滅。同十一日、

衆 しゆ

秀句に云わく「法華經を讃むといえども、  
還つて法華の

心を死す」文 しゅうく い ほけきよう ほ かえ ほつけ

選択集〈法然造〉に云わく「捨閉閣拋」  
せんちやくしゅう ほうねんぞう い しやへいかくほう

善導、礼讃に云わく「十は即ち十生じ、百は即ち百  
ぜんどう らいさん い じゅう すなわ じゅうしょう ひやく すなわ ひやく

生ず」  
しょう

また云わく「百の時に希に一・二を得、千の時に希に三・  
い ひやく とき まれ いち に え せん とき まれ さん

五を得ごう」

また云いわく「千せんの中なかに一ひとりも無なし」

どうしやく あんらくしゆう い だいじゆうがつぞうきよう ひ

道綽、安樂集に云わく「大集月蔵經を引く」『我が

まつぼう とき なか おくおく しゅじよう ぎよう お どう しゅ

末法の時の中の億々の衆生、行を起こし道を修するも、

いちにん う もの あ とうこんまつぼう ごじよくあくせ

いまだ一人も得る者有らず』と。当今末法はこれ五濁惡世な

じようど いちもん あ つうにゆう みち

り。ただ浄土の一門のみ有つて通入すべき路なり」

えしん おうじようようしゆう い りち しょうじん ひと

恵心、往生要集に云わく「利智・精進の人はいまだ難

がんろ もの

しとなさず、予よがごとき頑魯の者、あにあえてせんや」

こんぼんだいし

根本大師



でんぎようだいし  
伝教大師

さんけ  
山家

てんだい ごしん  
天台の後身なり

しゅごしよう

しようぞう

す お

まつぼう

ちか

守護章に「正像やや過ぎ已わつて、末法はなはだ近きに

あ

ほつけいちじよう

き

いままさ

とき

有り。法華一乗の機、今正しくこれその時なり」

い

いちじよう

いえ

もち

しようじよう

また云わく「一乗の家にはすべて用いずへ小乗・

ごんだいじようしじゅうよねん

もん

かい

お

じようどう

もち

権大乘四十余年の文。ただし、開し已わつて助道に用い

のぞ

るものを除く」